

## もう戦争はいやです

福岡県 田子良美

昭和二十年八月十三日ソ連軍の突然の襲来に生まれて  
一か月の赤子を背に四人の子供を連れて着の身着のまま、どこに行くのかもわからず清津の駅から汽車にのせられ城津の駅につき十三日の夜から翌朝の朝まで飲まず食わづ城津にて一人に一ツの大きなにぎり飯、子供が可哀相で涙もでませんでした。一夜明けた十五日終戦の詔勅に声もなく子供達を抱きしめるだけでした。朝鮮鉄道清津府土木課勤務の主人は鉄道施設のため殆ど家を留守にしておりましたので、五人の子供を抱えての、今日の放送は死の宣告も同様のものでした。しかしこのままでどうすると気を取り直し、何としても父母のいる京城まで行けば姉や妹達に逢えると不安を払いおとし少し安心しました。

平壤駅で妹婿が来ていてくれ、北朝鮮は危ないから自

分達の家は危ないので妻たちは昨日の内に京城に送った  
とこのことにホットしました。そして翌日京城に着いたと  
き、父母、姉夫婦が真先に赤子は生きているかと抱きつ  
かれました。十一月になるともう朝鮮は寒く、暖房も何  
もないところにはおられないので、皆で相談の末、内地  
に帰ることに決心をして、持ち寄ったお金を出し合っ  
て、病院車に乗せて貰いましたが途中何度もお金の無心  
をされ心細い思いをしました。

十一月二十日仁川に着き釜山についたのは三日目の朝  
でした。釜山に昔から仲良しだった朝鮮の友人がいます  
ので、船が出るまでの食料を調達に姉夫婦と出かけて行  
きますと、皆の無事な顔を見て泣いて喜んでくれました  
た。そして一杯の食料品を渡してくれまして、またくる  
ようにと言いながら、持って行ってやりたいが皆の口が  
うるさいから、夜そっとくるやうにと気をつかってくれ  
た嬉しさが忘れ難い思い出です。年寄り夫婦、病人の弟  
に赤子連れということて早い船に乗せると言われ船に  
乗ったのは良いものの、一人千円のお金を乗船口にいた  
朝鮮の女に取られ、次の荷物検査ではMPに頭から

D D Pを真白になるほどかけられて泣くに泣けぬありさまでしたが、どうにか船中に落付くことが出来ました。が、一番船底が指定の場所と言われたときはぞっとして子供をどうして、危ない綱渡りしながらおろすのかと、血の気が引いてゆく思いでしたが、五人もの子供を見ながらべそをかいている私に、M Pが自分の鼻を指で指しながら寄って来て、ひょいと小脇に大きな順に抱えて船底まで、船綱をつたっておろしてくれたときは、戦争中あんなにも憎かった米兵がありがたく、手を合わせて感謝しました。

船中二日間は釜山で作って持って来たおにぎりで飢をしのぎましたが、博多に上陸して、主人の故郷徳島に帰るまで、汽車、連絡船、徒歩と考えるだけで、情けなく、京都に帰る父母、妹、姉夫婦との別れがつかなく、子供の手前も忘れて母にすがって泣きました。

私達が徳島に帰りついたのが十一月末でしたが主人はそれから二十日ほど過ぎた十二月二十日、一人で少し気の毒気な顔で帰って来ました。